

DI

プレミアム版

NSAIDsで悪化した腹痛に アミティーザが処方された理由

TREND

薬機法改正に向け 議論スタート



新連載

みどり先生の 薬局症例カンファレンス

膝の痛みを訴える80歳女性 処方薬をどう評価する？

特集

在宅移行をスムーズに

退院時処方 ここに気を付ける！

特集

在宅移行をスムーズに

退院時処方 ここに気を付ける!

—包化されていない大量の薬、自己管理が難しい複雑な用法—。初回訪問で退院時処方をチェックする際には在宅移行期ならではの注意すべきポイントがある。退院時のよくある処方薬のピットフォールを紹介しながら、薬剤師の介入どころを紹介する。

(末田 聡美＝日経メディカル、坂井 恵)

ピットフォール-1 在宅医の初回処方箋が退院時処方と異なる (PE4)

ピットフォール-2 退院時処方が飲めない。その理由は? (PE6)

ピットフォール-3 処方箋に薬局で交付できない注射薬が…… (PE8)

ピットフォール-4 退院時処方では疼痛管理が難しいことも (PE9)

入院をきっかけに外来通院ができなくなり、退院後、在宅医療に移行する患者は少なくない。療養環境や主治医などが変わること、在宅への移行期には、薬にまつわる様々なトラブルが起こりがちだ。例えば、退院時に病院から出された薬が指示通り飲んでいなかったり、入院前に服用していた他科の薬が気付

いたら中断されていたり、薬局から交付できない薬が処方されていたり、麻薬がうまく使えていなかったり……。こうしたトラブルは、薬局薬剤師が早期に介入することで防げることも多い。2024年度調剤報酬改定では、退院直後などに薬剤師が患者を訪問し、服薬状況の確認や薬剤の管理などを行った場合を評価する「在宅移行初期

管理料」が新設された。認知症や末期がんなど算定対象は限られるものの、在宅移行時における薬剤師の関与に対する期待の表れといえるだろう。そもそも薬剤師が関わるタイミングには様々なパターンがある。在宅療養が決まった段階で、入院先の地域医療連携室や介護支援専門員(ケアマネジャー)などから連絡があり退院時カン

ファレンスと呼ばれる、患者が退院する直前に在宅医から依頼の連絡が入る、在宅医の初回診療のタイミングで連絡があり、その後すぐに処方箋が送られてきて在宅訪問が始まる——などだ。退院患者の薬のトラブルを防ぎ、スムーズな在宅移行を支援する上では、日ごろから近隣医療機関の地域医療連携室やケアマネジャー、在宅医との

連携を深めて、薬剤師が早期から介入できるよう備えておく必要もあるだろう。次ページからは、在宅移行期に遭遇しがちな薬にまつわる様々な問題と、その解決法を在宅エキスパートたちに聞

いてまとめた。やっと自宅に戻れてホッとしている患者や家族が、薬のことで困ったり、不安になったりしないよう、今こそ薬局薬剤師の出番だ!



Pitfall 2

退院時処方が飲めない。 その理由は？

退院時に医療機関から出された薬（退院時処方）を、患者が指示通り服用できないといったトラブルも多い。代表的なのは、退院時処方が一包化されず、正しく服用できていないケースだ。退院時処方PTPシートのまま交付する病院も少なくないが、患者や家族が困っていることも多い。

そうした事態に備えて、つなぐ薬局の阿部真也氏は「退院後の初回訪問時にはチャック付きポリエチレン袋とお薬カレンダーを必ず持参し、必要に応じて、その場で数日分を即席で“一包化”してカレンダーにセットする」と話す。残りの薬は薬局に持ち帰って一包化した上で、患者宅に届ける。

また、退院時処方が一包化されているケースであっても、「下剤など自己調節したい薬まで一包化されてしまっていることがある」と指摘するのは、まんまる

薬局（東京都板橋区）薬剤師の岸和（なごみ）氏。一包化されているからといって安心せず、別包の可否を本人や家族に確認する必要があると話す。

古い薬が返却され混乱

さらに岸氏は、「患者が入院時に持参した古い薬が退院時に返却されることがあり、患者が間違えて服用する事故につながりかねない」と注意を促す。

実際に岸氏は、入院中に使用しなかった持参薬を退院時処方と一緒に渡され、どちらも「朝食後」と書かれてあったため、患者が両方服用していたという事例を経験した。持参薬と退院時処方ほぼ同内容で、患者は倍量を服用していたことになる。幸い、健康被害はなかったが、「早期に回収するなり、注意喚起できればよかった」と岸氏は振り返る。

他にも、入院中に薬剤が変更となり、その際の残薬が退院時に患者に返却されることもある。のぞみ之花クリニック（千葉県柏市）薬剤師の餅原弘樹氏は「特に、睡眠薬や鎮痛薬の頓服が多い」と明かす。例えば、入院時にアセトアミノフェン（商品名カロナール他）が1週間分処方されたが、その2日後にロキソプロフェンナトリウム水和物（ロキソニン他）に変更となった場合。退院時処方として「疼痛時」の指示でロキソプロフェンが出され、さらに既に飲まなくなったアセトアミノフェンも「疼痛時」と書かれた薬袋に入れて渡され、患者が混乱するといった事態が起こり得る。退院後の早い段階で「飲むべき薬とそれ以外を整理して、はっきり分かるようにしておくことが大切だ」（餅原氏）。

服薬回数にも目配りを

退院時処方の服用時点の指示が患者の生活パターンに合っておらず、飲めなくなるケースも少なくない。特に服薬回数が多いと負担になり、服薬忘れにもつながる。1日3回服用や食前服用の薬が含まれるケースなどでは、シンプルな用法にできないか検討したい。

図2 ヘルパーの訪問時間に合わせて処方提案した一例（齋藤誠也氏による）

① 【般】アムロジピン錠5mg 1回1錠（1日1錠）
トラゼンタ錠5mg 1回1錠（1日1錠）
1日1回 朝食後

② 【般】カルボシステイン錠250mg 1回2錠（1日6錠）
【般】アンブロキシール塩酸塩15mg 1回1錠（1日3錠）
1日3回 朝昼夕食後

↓

① 【般】アムロジピン錠5mg 1回1錠（1日1錠）
トラゼンタ錠5mg 1回1錠（1日1錠）
【般】カルボシステイン錠250mg 1回2錠（1日2錠）
【般】アンブロキシール塩酸塩徐放口腔内崩壊錠45mg 1回1錠（1日1錠）
1日1回 昼食後



図3 規格による錠剤の大きさの違いの例（フォシーガ錠添付文書より）



図4 初回訪問で確認したい主な内容（餅原氏による）

- 禁忌薬 無 有()
- アレルギー歴 無 有()
- 副作用歴 無 有()
- 苦手の剤形 無 有()
- 薬剤管理者 本人 家族() その他()
- 薬剤使用ADL
理解度: 識別: 取り出し: 嚥下:
- 調剤方法 薬袋 カレンダー 簡易懸濁 BOX
- 生活リズム
起床 朝食 昼食 夕食 眠前
- その他()

特に、独居で認知症があり薬の自己管理が難しい患者では、ヘルパーや訪問看護師などに服薬を見守ってもらう必要がある。その場合は服薬タイミングを1日1回にまとめる必要が生じる。

サン薬局の齋藤誠也氏はその一例として、肺炎で入院後に在宅移行した視力障害のある75歳男性のケースを挙げる。患者は独居で、薬が判別できず、齋藤氏はケアマネジャーと相談し、毎日のヘルパー訪問時の服薬見守り体制を整えた。その一方で、医師と相談し、処方1日1回服用に整理し、見守りを可能にした（図2）。こうしたケースでは、「医療・介護サービスが、どのタイミングで介入するかを把握しているケアマネとの連携は必須」と齋藤氏は強調する。

薬が問題なく飲み込んでいるかも、最初に確認しておきたい点だ。トライアドジャパン（相模原市南区）基幹薬局

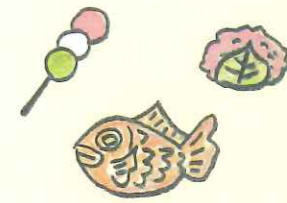
推進部北里担当部長の野田和多流氏は「入院中は飲めていたはずの錠剤が、自宅では服用できないといったことがある」と話す。

看護師の見守りの下、時間をかけて服薬していた入院中と違って、自宅や施設では服薬に時間や手間を割けないことが多く、飲み込みにくい薬は服薬アドヒアランスの低下につながりやすい。野田氏は「飲み込みにくさがあるようなら、口腔内崩壊錠に変更したり、粉砕して服薬ゼリーやとろみをつけた水などで服用するよう指導する」と話す。

薬の大きさにも配慮が必要だ。「錠数が増えても、粒が小さい方が服薬しや



- ▶ 誤って服用しそうな古い薬はないか
- ▶ 見守りが必要な時は1日1回服用に
- ▶ 飲み込めているか、介護負担がないか



すいという患者もいる」（岸氏）。例えば、フォシーガ（一般名ダパグリフロジンプロピレングリコール水和物）10mg錠1錠の処方を、5mgを2錠に規格変更してもらおうことがあるという（図3）。

家族や介護者の介助負担にも目を向けよう。「本来、服薬介助の負担軽減が目的であるはずの簡易懸濁法が、かえって家族や介護者の負担となっているケースもある」とピー・アンド・エス（秋田市）の在宅医療連携室室長の齋藤淳氏。簡易懸濁法は、錠剤やカプセルをそのまま約55℃の温湯に入れて崩壊・懸濁させるもので、粉砕や脱カプセルの必要がない、経管投与時はチューブ閉塞が回避できるなどのメリットがある。その一方で「温湯の用意や、崩壊・懸濁までの手順が負担と感じる介護者も多い」（齋藤氏）。退院時に病院で指導されている場合、家族や介護者が正しく実施できているか、継続できそうかを確認した方がよさそうだ。

こうした退院から在宅への移行期に起こりがちなトラブルを防ぐには、退院後早い段階で、患者の状態や生活リズム、家族の介護力、服薬管理は誰が担うかなどを把握し、服用の可否、介護者の負担などを確認することが重要となる。図4は、餅原氏が患者の情報を漏れなく収集するために用いているチェックシートだ。こうしたツールを用いるなどして、患者が確実に服薬できるよう、目を光らせたい。